

第8回感情心理学会セミナー 「感情と無意識」セミナー概要

北村英哉（関西大学）

学術プログラム委員セミナー担当

第8回セミナーでは、「感情と無意識」というテーマで2015年4月18日（土）関西大学にて開催された。

近年、多くの一般書で非意識過程や直観、それに伴うエラーや逆に無意識の「賢さ」などについて翻訳を中心に刊行が相次いでいる。感情過程においても無意識の過程は大きな役割を果たしている一方、「無意識」と言えばフロイト理論など、いまだ科学的検証とは異なった形で人々に定着しており、「無意識イメージ」は科学的にリニューアルされない状態である。

学会という学術団体においては、無意識に対して現在科学的にどのようなアプローチがなされ、何がどこまでわかっているのか、その知見を広く共有し、次なる科学研究へと進めていく課題をも理解することが求められるだろう。そこで、以下の登壇者を招いてセミナーを開催した。

東洋大学の下田俊介先生からは、「Implicit Positive and Negative Affect Test (IPANAT) を用いた感情測定」、日本学術振興会の川上直秋先生から「単純接触効果と無意識—われわれの好意はどこから来るのか？—」、同じく日本学術振興会の渡邊言也先生から「情動反応が学習過程に与える影響とその特徴」というタイトルで、関西大学、北村の司会で講演いただいた。

内容の詳細は各講師の先生の論文を参照していただきたいが、ここでは討論を含めた概要に触れる。（以下、敬称略）

下田発表では、無意図的な評価のレベルで無自覚な感情の誤帰属過程が進行することが描かれた。近年話題の潜在測定と顕在測定との関係、顕在測定が可能となるプロセスやその根拠ないしモデルについて討論が行われた。

川上発表では、多様な表情や行為のシーケンスを関

下呈示し、人物への好意評価が上昇する関下単純接触効果のさまざまなバリエーションが紹介された。「多様な表情呈示が人物の同定の容易さと関連するのではないか」、「多様な表情ではネガティブな表情も多いがなぜ好意的評価が上昇するか」、「行為シーケンスの中身が不道德なものであったらそれでもポジティブな人物印象になるか」など、さまざまな視点からの質問、指摘により討論が活発になされた。

渡邊発表では、確率学習の際に情動条件づけを含めると効果的学習が促進される例などが紹介された。扁桃体から線条体に至る経路によって賞罰の学習（あたり、外れのある確率学習）が何らかの修飾を受けていることが示唆された。

全体討論では、フロアの太平先生からそもそも感情はあると言えるのかという「基本的情動」というものの存在に疑問を呈するBarrettの議論などが紹介され、arousalという次元はあると考えられても、valenceはどうなのかという問いが投げかけられた。

学習を成立させるうえで感情価は重要な意味を持つという回答もあったが、複雑な脳機構が判明してきて、各情動との対応関係が必ずしも明確なカテゴリー的対応を示さずに、各部位との協同的働きの様相を示していることがますますはっきりしてきた昨今、情動のカテゴリーとは認知する側の人間の心の中にだけ存する一種のイリュージョンであるのかどうかは興味深い論点であろう。

イリュージョンであったとして、そのカテゴリーに基づいて研究を行うことはまた別のことであり、研究意義がないということにはならないだろうから、そうした科学的現実を踏まえつつ、「情動の機能」についてもさらに研究が進展していくことが期待される。